

# 現代社会における宗教の役割

カレル・ドベラーレ

栗原淑江(訳)

現代社会は産業化の過程の産物であり、巨大な資本投資、産業技術への科学の適用、大規模な生産を必要とした。したがって、大規模で自動化された工場が設立される必要があったが、そうした工場は熟練した流動する労働力を求めたので、結果として大都市が発展した。

## 一、現代社会の特性

産業化の結果のひとつに、経済が社会の独立したサブシステムとなったことがあげられる。すなわち、経済は自らのもつ諸価値——能率、業績、経費抑制、利潤創出

——を發展させる社会の独立した一部分となり、その結果、他と分離した制度的イデオロギーおよび特殊な制度的諸規範、つまり経済的諸規範となるにいたった。経済活動は隣人や仲間の労働者たちへの愛を促進することはなく、逆に自己実現を促進する。日本のある自動車工場の臨時労働者である鎌田氏は、工場長の部長補佐昇進に対する労働者たちの反応について、日記に次のように記している。「彼(工場長)は作業場を離れ管理職につこうとしている。人々(労働者たち)は彼をのしりはじめた。工場長がかれらを彼自身の昇進のための踏台にしたので、

(彼に)仕返しをしているのだ。」(傍点は筆者)

そうした合理的経済は、社会の他の領域もその組織化のモデルに適応させようとする。国家は高度に合理化した官僚制をうちたてなければならなかった。教育制度も適応しなければならなかった。現代の産業社会で求められるのは、高度の合理化を予想した訓練を受けた人員である。産業があらゆる人々を効果的に使えるように、人は知識と技術を身につけなければならない。すなわち、読み書きを学ばなければならず、またあるものは数学、外国語、コンピューター科学を、他のものは多くの技術——穿孔、ろう付け、溶接など——を学ばなければならない。

最後に、家族も従わなければならなかった。まず、男性たちは家から離れた工場に働きにでたので、家に帰れるのはせいぜい夜おそくか、たいてい週末だけ、また時どきは休日だけであった。さらに、家族は男性たちと一緒に都市に移住しなければならなかった。伝統的な三世代家族はますます二世代家族に縮小した。大きくなった子供たちが都市に移る一方、両親たちは残された。子供

たちは都市で結婚し、新家庭に孫が生まれたときには、祖父母からは遠く離れた所にいた。私が名古屋で会ったある夫婦の第一子は生後十カ月であったが、九州に住む夫の両親はまだ孫をみていなかった。このように、移住は都市化に強く影響を与えたが、地方の共同体にも影響を与えた。地方の共同体は衰微したのである。若い人々は去り、年配者だけが残された。現代化が家族に与える影響は今日も続いている。女性たちはますます、家庭外で働くために日中は家族を家に残してゆくようになっていく。

## 二、伝統的社会と現代社会における宗教

今まで述べてきたすべてのことが宗教とどう関係するのかが問われよう。伝統的には、生活は極めて統合的であった。経済は家庭と地方共同体の一部分であり一片であった。子供たちは父母の職業を学んだ。かれらは家庭に生まれ、村に止まり、両親と同様に生き、そこに埋葬されたのである。幾世代にわたって家族は同じ共同体に住んだ。前近代社会の村は本質的に農業的であり、同じ

家庭の人々は野で共に働き、植え付けと収穫の期間には全共同体が加わって共に働いた。共同体の行事が発展したが、ほとんどすべての種類の祝祭は農業に関係していたと考えられる。すべての祝祭は本来宗教的で、共同体、家庭、個人の生活に重要な時を画した。繁殖エネルギーと考えられ、創造と成長の神秘的な諸力を説明するような創造の魂あるいは神への信仰と、それらの神のためになされる——食物と保護を得るための、そして収穫を得させてくれたことに感謝するための——儀式は、共同体の生活と仕事に聖なる靈氣、宗教的靈氣を与えたといつてよい。家での儀式も聖なる性格をもっていた。成年式、結婚式、葬式と追悼式がそれである、村での生活は統合的であった。家族・仕事・教育を統合して成り立っている。パターンが、聖なる宗教的靈氣によって統御され、貫かれていく。

しかし今や、都市、近隣と家庭における生活はむしろ分解している。子供たちは両親と異なる職業を学び、学校に行く。他方、父やそしてときには母も異なる場所に働きに行く。共通の生活は著しく減少している。そして、

生活の異なった諸部分は、もはや聖なる靈氣とは融合しない。教育は合理的過程であり、経済は合理的手続きに基づき、両親でさえ子供の数を制限するために合理的技術を採用する。生活はあらゆる部分にわたって合理的、技術的となり、生活の聖なる靈氣は大方失われてしまった。

現代では、世界に関するまったく世俗的な観点がみられ、そうした観点は自然環境に対する操作的態度を増大させている。経済はますます合理化され、宗教的見解よりはむしろ科学的見解に支配されるようになっていく。そこでは実用的、形式的、契約的で、人格の一部分に限定された関係、移ろいやすい関係が発展し、他の機能的諸領域でもそれがますます典型的になりつつある。伝統的な村においては感情的、全体的で慣習に規制された関係が支配的で、個人そのものが目的と考えられていたが、もはやそうは考えられない。共同体には知己の人々の顔と顔を付合させた関係があったが、それとは対照的に工場、経営管理には未知の役割遂行者同士の相互作用がある。そして、そうした官僚的な型の諸関係は社会に広まっている。社会学者はこれを生活(世界)の利益社会化

(Vergesellschaftung)とよぶが、これは都市の生活、商業、福祉、娯楽に広まっており、近隣さえもますます利益社会化している。共同社会(Gemeinschaft)が社会組織の基礎的な原理であることをやめ、ますます利益社会的(Gesellschaftlich)様式に発展するにしたがって、科学と技術はますますこの世界を支配するようになり、生活に対する宗教的、呪術的方向づけは勢いを失う。

### 三、機能的合理性は意味と全体性の問題を解決しない

したがって諸個人は絆を失い、見捨てられて、アノミイが都市生活に蔓延する。しかし、かれらは失望、死や災難に際して求められる感情的適応にはまだ直面している。人間の生におけるそうした偶然性は、時おり人々に生の意味と目的についての根本的な問いを起こさせる。こうした「突破点(breaking point)」において典型的な「なぜ」という問いが生じ、この問いは意味ある答えを求め、この問いははまだ重きをなしており、科学的、技術的な答えも、人間の生の偶然性に密着した感情的恐

れや混沌を減少させることはない。生と死をよりよく理解することはできても、そのことが愛するものの喪失に伴う感情的諸問題を解決するわけではない。地震や自然災害を科学的に理解することはできても、知識はそれらを取り巻く恐れなどの感情を取り除くわけではない。

さらに、現代社会においては新たな問いが現われる。機能的諸制度の基盤となっている合理的諸規範は、互いに分離しているだけでなくしばしば不調和なので——家庭生活を支配している諸規範(愛、伝統、保護)と経済活動を導いている諸規範(競争、業績、更新)の対立を考えればよい——、諸個人は自らをそれらの諸規範に適應させなければならぬ。さらに、異なった制度的諸分野——家族、経済、学校とレジャー活動——における遂行の「意味」は、所与の制度的領域の機能的要求という点においてのみ「合理的」であるにすぎない。その「意味」は個人の生涯をおおう全体的な意味の脈絡からは離れている。人々は、そうした断片的な経験に満足せず、自らの生の統一を求めて生きるだろう。かれらは対立する制度的諸部分や諸領域における異なった経験を超越したいと思

い、それらをより広い観点の中に位置づけたいと願う。宗教的世界観が勢いを失った時期に、死、苦痛や喪失を前にした意味への問いはまだ優勢であり、それに加えて部分化された断片的世界における個人の生の統合への新しい要求が現われた。このことは現代人を困惑させたが、それは現代人が彼を愛し保護してくる共同体の支えも失っているだけにいつそう劇的である。

#### 四、意味の探求——寄木細工 (bricolage)

##### と基本的意味体系

個人の生の意味と統合を求めると問いに對する答えは、伝統的に宗教と呪術に基づいた共同体が与えていた。しかし、人々が科学的答えも不十分であると気づいたまさにそのとき、宗教的、呪術的な答えは勢いをなくしており、人々を困惑させている。意味と統合へのこの永続的な問いに直面し、答えを得ることができず、共同体の支えも失って、個人は今や自ら新たな意味と統合を探さなければならぬ。ルックマン (T. Luckmann) はこれを個人的意味体系の寄木細工 (Bricolage) とよぶが、個人は

それを——民俗宗教や組織的宗教、たとえば神道、仏教、キリスト教から借りた——宗教的諸原理や、政治的、社会的イデオロギーや科学的知識に基づいて解決しようとする。この寄木細工は、生における拠り所、すなわち意味統合を提供するだろう。

何人かの西欧の研究者は、意味体系の諸類型を見出そうとした。ほとんどの寄木細工は、四つの型の意味体系が組み合わさったものと思われる。すなわち、有神論的意味体系、個人主義的意味体系、社会科学的意味体系、そして神秘主義的意味体系である。

有神論は、貧困や苦難を引き起こすことによって現世の生活に影響する人格神への信仰に關係している。人々は自らの功績によって死後に報われると信じている。

個人主義は、個人的業績と平等を強調する。貧困と苦難は自ら引き起こしたものである。個人は失敗したならば自らを責めるべきであるとされる。

社会科学的意味体系は、個人は子供時代の諸経験、社会的環境と発展の産物であるとする。苦難は社会

とその階級構造によって引き起こされるとされる。

神秘主義的意味体系は、以上のものとはまったく異なっている。有神論においては現実を支配する力は神であり、個人主義においては自己自身であり、社会科学的意味体系においては社会であった。神秘主義はそうは問わない。神秘主義が示唆するのは、通常の社会的諸影響を超越し、より深く、より意味のあるレベルの現実を体験することである。人々は自然を体験すべきであり、芸術や森から学ぶべきである。そのことは人々に新しい洞察をもたらし、内的宇宙、幻想的世界における生を刺激するだろう。また深い感情を刺激するだろう。苦難は内的宇宙の欠如によって起こるのである。

現代社会における宗教の役割

第一の意味体系である有神論には、西欧の伝統的宗教の影響がみられる。個人主義は、世俗内的禁欲を強調したプロテスタント倫理の完全な世俗化である。社会科学の意味体系は、心理学、精神医学、社会学、生物学の組み合せである。最後に神秘主義は、多くの学者によれば、西欧神秘主義の影響を受けているが、また東洋の神秘的

諸宗教——スーフィズム、道教、ヒンドゥー教——の影響も受けている。

異なったこれらの意味体系は、人々が断片的な世界で諸経験を統合し、個人の生における苦難、死、苦痛やその他の偶然性に意味を与えるために個人的意味体系をうちたてるうえでの基礎的理念を提供する。

何人かの研究者によれば、自身の生を統合しそれに意味を与えるうえで、大学教育を受けた若い人々はとくに社会科学の意味体系や神秘主義的意味体系からの要素を用い、反対に、年配の教育のない人々はむしろ伝統的な意味体系を用いるとされる。

#### 五、他の現代的問題——市民的行為の動機

##### つけ

しかし、宗教と意味体系の機能は、意味と統合に関する個人的問題、いわゆる個人の私生活に限定されているわけではない。役割遂行についての社会学的分析は、役割遂行者の動機が最も重要であることを立証している。役割遂行は役割遂行者の知識と技術だけによるのではな

く、大部分かれらの動機にもよっている。役割遂行者はうまく遂行するように動機づけられねばならない。

近年にみられる市民的秩序の衰弱、暴力、蛮行、風紀の乱れ、長期欠勤、民主的諸原理の後退、自然環境の搾取と汚染について、ウィルソン(B. Wilson)は次のような適切な問いを發した。「それなしには合理的な制度さえも作用しないような市民的良心、私心のない善意はどこから生じるのであろうか。」ウィルソンは、機能分化と世俗化の結果、宗教や教育といった徳を生じさせるような伝統的作用がますます弱くなっていることを指摘する。ウィルソンの問いはこうである。社会は動機の循環に基づいた単なる交換体系として作用できるのであろうか、あるいは社会は必要とされる積極的諸価値に根差したより広い動機の基礎であらうかと。そして彼はここに宗教の機能をみると結論づける。換言すれば、ウィルソンは——筆者も同意見だが——、システム、すなわち個人、社会化と社会統制の技術に「人を配置する」諸単位をうまく扱うことが必要であるが、その諸単位をシステムはまだ組み込んでおらず、過去の宗教意識と道徳か

ら借りてきた資本に頼っているという。

それでは、なぜこうした新たな現象、現代の意味体系(神秘主義のおよび社会科学の意味体系)は、伝統的な意味体系(有神論的と個人主義の意味体系)に反して、市民的役割遂行への社会的動機の基礎を提供しないのであろうか。

## 六、市民的行為への動機づけと

### 新たな意味体系の問題

意味体系としての社会実在論は、伝統的な意味体系である有神論と個人主義に挑戦してきた。社会実在論は社会科学から引き出され、人間の運命は「人間あるいは神のどちらかによって完全に統制されるわけではない」とする。社会実在論は、人間生活を支配する社会的諸制度、社会——すなわち社会階級、近隣、家族、組織、官僚制、伝統——は人間が作ったものであって、これらの構造は悪を産むとする。

それらは、何よりも人間が作ったものなのである。あるものはそれらを陰謀的な社会勢力、すなわち権力者によって操作される社会的諸制度と考える。例えば、マル

クス主義はそのように考える。

またあるものはそれらを潜在的な社会力、すなわち、今意識的な人間の統制から独立して作用している歴史的な社会力によって作られた社会的現実であると考え、われわれの社会的諸制度を形成した伝統の盲目の力の結果であると考える。多くの若者はそれらに反抗する。かれらは問う——われわれを愚かにする社会の権力構造はいうまでもなく、そうした歴史の盲目の力になぜ従わなければならないのか、と。

社会的諸制度は人間の作ったものであるだけでなく、また悪を産みだすものである。社会的諸制度は、不平等、不正、罪、疎外、欲求不満やその他の社会的諸悪を促進する。個人は基本的には善良なのであるから、すべての社会的病理は社会構造に責があるはずである。

そうすることによって、この新たな意味体系は社会の成員にいかなる責任も与えないが、反対に伝統的意味体系はすべての個人に責任を与えていたのである。有神論においては人は神の前に責任があった。神は生涯の終りに問うだろう。「私はあなたに五つの才能を与えた。あ

なたはそれらをもって何をなしたか。」また、個人主義においては人は自らに責任があった。社会実在論においてはすべての個人的責任は消え、この意味体系は明確な二者択一も、明確な標準も、判断の規則も、めざすべき対象も与えない。

そうした真空状態で、完全な相対主義から生じた標準形式、価値の危機に直面して、あるものは神秘主義的な解釈に新たな意味を求めた。いくつかの「東洋宗教」——とくに道教、ヒンドゥー教、スーフィズム——は、人々が新たな洞察を探求するように刺激することによってそれに貢献してきた。「神秘的」志向のもつ判断をこえた性格は、ある人々には自らを新たな社会的責任、新たな社会的実験に向けて解き放つ手助けとなった。新たな意味体系にのっとって生活する人々が集中しているサンフランシスコ湾岸地域(CSB)では、そうした「神秘主義的」意味体系が人々にあらゆる社会的諸制度で社会的実験をするように促していることが、ウスノウ(R. Wuthnow)の著作から明らかである。こうした生活様式をもつ人々が求めるのは、家族生活の二者択一的様式——試験的結婚、

結婚しない同居、集団結婚、子供をもたない結婚、連続的な一夫一婦婚、同性結婚は広く受け入れられつつある——余暇時間の行動——例えばマリファナ嗜好——、そして宗教である。政治的、経済的な実験をするものもある。しかし、「神秘主義的」意味体系は、どちらかといえば経済や政治のような公的生活には触れない。かれらはウィルソンが指摘するような「自身による、自身のための、自身の救い」を、とくに私的生活に求めるのである。ウィルソンがそうした人々の集団は救済という宗教的理念を再解釈しているのだと述べるのは正しい。かれらは「明らかに、アメリカ的快樂主義の強い刻印をもち、現在の楽しみを強調し、個人が生き生きと魅力的で自己実現する人間になるためには真の変革が必要であるということを否定する。」(付け加えれば、かれらはとくにこうした見解を支持すると思われる東洋の諸宗教を選んだのである。)私にはそうした世界観はその信奉者の理性を失わせると思われる。経済と政治は大きな変革は許さないが、人がいわゆる私的領域で経験することは許すのである。いかなる緊張がつくりあげられようと、その世界観は公

的制度の外側にとどまり、結局私的領域での実験にあえて入ってゆく諸個人だけがそれによって害を受けるだろう。この世界観はまた、自己防衛的である。すなわち、信奉者はいわゆる抑圧的文化を拒否するが、かれらの「自己実現」が伝統的文化で許容される程度にとどまる以上、その文化に依存しなければならぬ。この世界観はまた、高等教育を受けた余裕ある上流と中流上層の人の意味体系である。すなわち、麻薬や、失敗した結婚や情事の後に援助しなければならぬ「一連の女たち」のために金を使うことのできる人々の意味体系である。そうした意味体系は、社会の中流下層や労働者階級を引き受けはしない。

### 七、新たなあるいは適合的な宗教の探求

それでは、新たな意味体系の欠陥を正すためには、どこを探求すべきだろうか。現代人が必要としている意味、全体性と動機づけへの問いに答えを与えうるのは、いかなる型の——宗教的あるいはそうでない——意味体系であろうか。

いままでの分析に基づいて、新たな意味体系がもつべき特性を次のように明示することができよう。

1. 宗教的および他の意味体系は共同体的な基盤をもつべきである。それらの意味体系は社会のいくつかの古い共同体の構造にとつてかわり、それらを再活性化できるはずである。小集団の会合はそうした組織構造の本質的な一部分であろうし、共同体の構造は家族を中心とするけれども、諸個人がどの特殊な集団に属すかという選択を認める。

(1)人々の生を脅かすアノミーを処理し、(2)我々の生における雑多な混沌とした普遍的経験をとりまく感情——死、病氣、換言すれば、我々の生を脅かす偶然性がかきたてるすべての感情——を処理すべきものは、そうした共同体に基づいた構造なのである。

2. 共同体に基づくそうした構造は成員に「生の飛躍(élan de vie)」を与え、それを儀礼や祭を通して促進し活性化するはずである。宗教は科学と対立すべきではなく、科学の限界を超えて、合理的な科学や技術と矛盾しない仕方での非合理的な諸局面を「説明」すべきであ

る。

3. 宗教的および他の意味体系は、個人の生活世界の全体にメッセージを拡大すべきであり、家族や近隣のような私的な領域に自らを限定すべきではない。それらの意味体系は私的生活と公的生活——人々の経済的、政治的、教育的な生活——に動機づけを与えるべきである。宗教は社会の機能分化を受け入れなければならないけれども、サブシステムの基本的価値には絶えず挑戦すべきである。それがために宗教は正規のサブシステムが操作するやり方に挑戦する補助的な構造や限定された柱となる構造を刺激することができる。すなわち、実験的病院、引退した市民のための実験的ホーム、実験的小学校と中等学校、実験的大学などであり、そこでは宗教が社会のサブシステムの機能化のための基準を設定するのである。

4. そうした意味体系は現代的価値、すなわち平等と業績に基づくべきである。しかし、それらは責任を強調することによって過度の個人主義をもつべきである。現代世界における諸個人は社会的責任によってチェックされるべきである。効果的に作用するためには、正当的権

威が社会機構の基礎であり、社会的権威の基礎は民主主義であることが認識されるべきである。

5. 宗教および他の意味体系はまた、心の広さを立証すべきである。いかなるシステムも、それだけが真実をもつとか全体的真実をもつとか主張することはできないように思われる。したがって、異なった諸意味体系が互いに尊重しあい、グローバルな社会の改良のために協同すべきである。諸意味体系は大いに寛容であるべきであり、それらもつ心の正しさと見解の正しさはその結果によって証明されるべきである。

6. 最後に、われわれは自らの共同体のみを考慮するべきではない。普遍主義が求められているのである。われわれは自らの共同体と組織の限界を拡張すべきであり、特に世界中の人々の生活環境を改善することで、また世界平和のための強固な基盤をうちたてることで、グローバルな世界共同体を考えてゆくべきである。また、そうした基盤が備わらない限りは、われわれの使命はまだ達成されていないことを知るべきである。エチオピアで今起こっていることは、世界中の人々への挑戦である。避

難所を捜して地下鉄の駅から駅へとうろつきまわる人々は、世界という社会機構の改良のために働くことへ人々を誘う他の要因である。

宗教的意味体系がこうした特徴をもつことが明らかになり、私はわれわれが世界の改良に運命づけられていることを、そして、宗教的意味体系が現代世界で生き残れるであろうことを確信するものである。

註

(1) S. KAMATA, *Japan in the Passing Lane: An In-productive Account of Life in a Japanese Auto Factory*, New York.

(くりはらとしえ・東洋哲学研究所研究員)

〔付記〕 本特集に掲載したドムラレーの二つの論文は、

一、「世俗化諸理論と社会学的パラダイム」は、『*Social Compass*, XXXI/2-3, 1984. に初出の同名論文(英文)を著者の了解を得て翻訳したものである。

二、「現代社会における宗教の役割」は、一九八四年、十二月に聖教新聞社主催の聖教文化講演会(東京)での講演原稿である。